

〈インタビュー〉 建築業界における環境対策の現状と今後

説得力のある明確な 環境性能データが求められる

(株)フジタ GX戦略部 部長 菅原 玲子氏に聞く

地球温暖化が危惧され、世界的に環境保全の意識が高まり、各分野で「カーボンニュートラル」に向けた施策も行われている今、建築業界の取り組みにも注目が集まっている。

編集部では、(株)フジタで環境負荷低減に向けた中長期的なビジョンおよび戦略の策定を担う、GX戦略部の菅原玲子部長を訪ね、建築業における環境負荷低減の動きと、同社の取り組みなどについて話を聞いた。



(株)フジタ GX戦略部
菅原玲子部長

部分的でなく、総合的な負荷低減が必要

まず、建築業における環境負荷の現状と、その対策についてお聞かせください――

建築生産での地球温暖化に係わる環境負荷については、最も大きいとされるのが、建てた後の運用段階におけるものです。ですので、今、建築業に最も強く求められているのは、建物を運用するときの環境負荷をいかに減らせるか、作る側ではいかに環境負荷のかからない建築を造るか、ということになってきます。運用時の一次エネルギー収支を実質的にゼロにするZEB(ネット・ゼロ・エネルギー・ビル)やZEH(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)は、そうした考えから環境負荷をゼロにした建物です。

またその一方で、当然ながら、建物を建てるまでにかかる環境への負荷を減らすための対策も不可欠です。建築に用いる材料、資材は莫大な量になります。特にコンクリートと鉄はCO₂排出量が大きく、環境への影響も大きくなります。ただ、影響が大きいということは、削減できる幅も大きいということですので、まずはそこから

対応していこうというのが、建築業界の姿勢と言えるでしょう。

もっとも、環境負荷を減らすためには、一部分を切り取って改善するのではなく、全体を見て、総合的に負荷をしっかりと減らせているかが重要となります。今、地球温暖化を食い止めるために、世界共通で取り組んでいるのがCO₂排出量の削減ですが、これについても、建物の設計、建設から、運用、廃棄までのLCCO₂*¹で議論しなければなりません。ある特定の段階のCO₂排出量が減ったとしても、そのためにほかの段階で排出量が増えてしまえば、削減したことにはならないからです。したがって、あらゆる段階、分野でCO₂を減らす取り組みをするというのが、基本的な考えになってくると思います。

製品の環境性能を比較可能な形で

環境負荷を総合的に判断することが必要とのことですが、それを実現するための現状での課題はどういったことでしょうか――

*1 LCCO₂: ライフサイクルCO₂。物の製造段階から、その物が廃棄されるまで一連の流れの中で排出されるすべての二酸化炭素。